

東京・春・音楽祭2020

東京春祭マラソン・コンサート vol.10

ベートーヴェンとウィーン

生誕250年によせて



第5部 ベートーヴェンと保守反動のウィーン

ウィーン会議の後、保守反動政治の牙城と化したウィーン。若き日に様々な変革の波を体験し、新時代の音楽家であることを自他ともに認めていたベートーヴェンは、この「冬の時代」をいかに生きたのでしょうか？

曲目解説

ナポレオン(1769-1821)登場以前にヨーロッパを戻すことを目標に掲げて始まったウィーン会議。その結果、ヨーロッパには久々の平和が戻る一方で、ナポレオンが錦の御旗に掲げたフランス革命の精神は、完全に葬り去られることとなる。市民たちは自由な発言をする権利を奪われ、それはベートーヴェンの創作活動にも大きな影響を与えた。さらに、甥カール(1806-56)の養育問題や、自身の健康悪化も加わり、彼のトレードマークである交響曲はもちろん、管弦楽曲はほとんど書かれなくなってしまふ。

そうした状況の中、例外的な存在こそが、ウィーンの民衆劇場の1つヨーゼフシュタット劇場の柿落しこげちに合わせ、1822年に作られた《献堂式序曲》に他ならない。しかも、この序曲の特徴である突き抜けたような晴れやかさや荘厳さは、1824年に初演された「交響曲 第9番」(いわゆる「第九」)の第4楽章にも通じるものがある。

「第九」の第4楽章に、ベートーヴェンは若いころから親しんでいたシラー(1759-1805)の「歓喜に寄せて」を用いたことは有名だ。ただしこれはシラーの原文の通りではなく、ベートーヴェンの追加作詞も含めた、かなり自由な引用となっている。そうであっても、シラーのテキストに共感した同時代人は少なからず存在しており、「第九」に先立って、例えば1796年に作られたライヒャルト(1752-1814)のものや、1815年に作られたシューベルト(1797-1828)のものが挙げられる。

ところで、保守反動体制下のウィーンでは、政治的自由を奪われた市民が、日々の享楽を求めるようになり、ベートーヴェンそっちのけでロッシェニ(1792-1868)に熱狂するようになったと言われている。だが、1822年に彼がウィーンに客演した際、人々の熱狂を巻き起こした歌劇《ゼルミーラ》は、ハッピーエンドこそ訪れるものの、自由をテーマとした真剣な内容である。またその音楽も「第九」の終結部分に通じる祝祭性に溢れており、巷間伝えられているように、ベートーヴェンがロッシェニを毛嫌いしていたと一概には言い切れない。

なお、ベートーヴェンは生涯の後期、内面世界に沈潜してゆくかのような、音楽的にも技術的に困難を伴う室内楽用の作品を書いてゆく。そうした難曲を初演していった功労者の一人が、ヴァイオリン奏者のシュパンツィヒ(1776-1830)だ。「**弦楽四重奏伴奏付きのヴァイオリン独奏曲**」は、名手と謳われた彼が、自身の技量を示すために作った一種のミニ協奏曲。そのたしかな腕前を今に伝える1曲である。

(小宮正安)